

役に立たないことをしてという風な文句を言っていましたが、私には大学の先生はこんなおもしろいことをして暮らしているのかと思いました。大学の先生は、仕事の中で冒険をしているといった認識です。これは大きくて、両親に僕は将来大学の先生になって、こんな冒険をするんだ、と言いました。父が医者だったので、医学部以外に進学する場合には理由が必要でしたから。父は、そうかと言つただけでした。後で聞いてみると、医者にならされて、一生文句を言っている医者の子を数多く知っていたから黙っていたそうです。しかし、私たちの時代では、どの学部に行けば、勉強の中で冒険ができるのかなどといった情報はよく分かりませんでした。

私はその後、「ケインズ」(伊東光晴、岩波新書)でケインズという経済学者の活躍や、今でいうマクロ理論の断片を知り、経済学が理論的な分析をすることを知りました。著者の伊東先生と後年親しくなるなどとは思ってもいませんでしたが。さらに、高校三年の夏に「経済学50年」(大内兵衛)を読んで、先生達の生活や、研究上のやりとりなどにあこがれを抱くようになりました。やはり大学の先生はおもしろい生活をしているという認識が高まり、専門は何でも良かったのですが、よくも分からずに経済学部を受験しました。経済学部に入って以来、研究分野は当初の予定とは大きくずれましたが、現在に至っています。

(もりむね きみお)

地球上にやさしい戦車

京都大学人文科学研究所 助手 藤原辰史

京都大学附属図書館の地下書庫に『戦車』という本が所蔵されている。古本市場では、3万円をくだらない貴重本だ。全602ページ+付録57ページ、高さは27cm、横幅は19cmとなかなか重厚な風貌である。奥付をみると、1942年6月21日、初版1000部発行、発行所は東京神田神保町の山海堂出版部とある。著者は猪間駿三という1902年生まれの陸軍少佐だ。

この本と出会ったのは、5年前、修士論文でナチスのポーランド侵攻について調べるために書庫に入ったときである。偶然見つけたこの本をパラパラめくると、第一次世界大戦から第二次世界大戦初期に至る世界各国の戦車の重量、最速スピード、定員、発動機、武装、搭載可能弾数などが詳細に記されてあった(ただし防諜のため日本の戦車についてはほとん

ど触れられていない)。ロールス・ロイス、ルノー、ブジョー、フィアット、フォード、ダイムラー、クルップ等どこかで聞いたような会社が戦車メーカーとして名を連ねる。しかし、こうしたデータは、いまでは軍事マニア向けの本やインターネットに書かれてあるから、それほど真新しいものでもない。ましてや、最先端の戦車を開発する企業の研究者にとっては無用の長物でしかないだろう。

正直に告白すれば、当時のわたしにとっても『戦車』は役に立たなかった。ナチスに関して貴重な情報を提供してくれるわけでもない。論文として役立つ箇所はほとんどなく、次の日には附属図書館のカウンターに返却した、と記憶している。

ところが、昨年末、バックナンバーセンターの桂キャンパス移転について調べようと思

つて附属図書館の地下をぶらぶら歩いていたとき、偶然わたしはこの本と再会した。修士論文執筆時の想い出に耽りながら、著者の「自序」、「第一章 近代戦車の現れる迄」と「第二章 戦車の構造」のあたりを漫然とめくつていると、俄然面白くなつて座り込んでしまった。しかし、さすがにお尻が冷たくなつてきたので（地下書庫にはもっと多くの机・椅子そしてコピー機を設置してほしい）貸し出して、家に帰つて読むことにした。読み終えた後、自分の態度を反省せざるをえなかつた。当時のわたしは、「論文の役に立つか立たないか」という二分法でしか資料を選別していなかつたのである。

著者の猪間は、歴史家ではない。自分を「技術者」と規定する戦車の技師である。実際、彼は、陸軍技術本部に所属していた34歳の頃、「チニ車」という試作車の設計をしている。「チニ車」は大阪砲兵工廠で制作された中戦車だが、別の技師が競作し三菱重工で作成された「チハ車」が「九七式中戦車」として公式に採用され、結局実戦に投じられることはなかつた幻の戦車である。とはいえ、日本の戦車技術の一端を担つていた人物であることに変わりはない。その技術者が描く戦車の歴史叙述にわたしはひきこまれた。わずか25ページのなかに、紀元前3500年から現在に至るまでの戦車史がとてもユーモラスな文体で綴られているからだ。

まず、「自序」で突然戦車への愛が吐露される。「著者は兎に角戦車が可愛い」。兵器を「カワイイ」と表現する感性に、いきなり驚かされる。つづいて、戦車の源泉についての記述も独特だ。「最も古い原始的な戦車は鎧・兜である」。だが、この「生きた戦車」には重大な欠点があるという。それは、スピードの欠如と人間の疲労だ。そこで馬と車を利用することになったというわけだ。

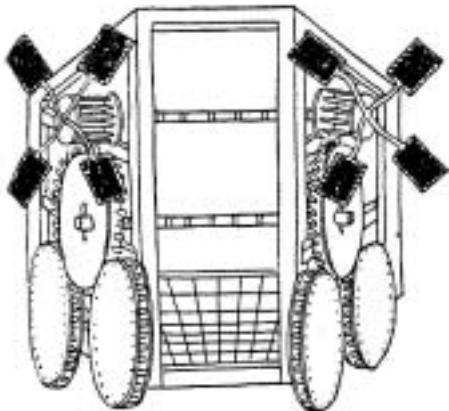
さらに、猪間は戦車に関する図版・文献コ

レクションをつぎつぎに提示する。「紀元前3500年代の古代バビロニアの印璽」、「古代バビロニアのラガッシュに起つたウル・ニナ王朝の第三世のエアンナトゥムの戦勝記念碑裏面」（紀元前2000年頃）、「アッシュール・バーン・アブリ三世の獅子狩りの図」（紀元前7世紀頃？）、「志那山東省武梁祠彫刻」（紀元150世紀頃）旧約聖書に出てくる「鉄の戦車」。ほかにもインドやエジプト、ギリシャ、ローマ、アンコール・ワットの遺跡の壁、日本では『南総里見八犬伝』からの2ページにわたる引用もあり、まさに戦車史大全である。これらは、動物に車をつけて、車を走らせる類のもので、内燃機関を利用する近代戦車と区別するために、猪間は「チャリオット Chariot」という語を用いている。

チャリオットといえば、1482年にレオナルド・ダ・ヴィンチが友人に宛てた手紙を引用することも忘れない。「私は目下丈夫な被覆されたチャリオットを作りつつある。それがその鉄砲を発射して前進するに当つては、如何なる優勢な敵といへども必ず敗北する、そしてこの車の後について歩兵が何等の抵抗を受けることなく安全に前進する事が出来る」。猪間は、これを「驚くべき文章」と褒めちぎっている。その理由は、戦車の使用法について、歩兵と組み合わせないと戦車の威力が出ない、という第一次世界大戦後によく確立したセオリーをすでに論じているからだそうだ。

しかし、実のところわたしが最も驚嘆したのは、ダ・ヴィンチの手紙ではなく、その手紙の10年前に描かれたらしい「装甲風力自動車」という図だ（図参照）。これについて、猪間は、技術者の視点からつぎのように解説する。「Valturioと云ふ人の考案である。装甲自動車どころではない、自動車の元祖と云つてもよからうが、何ともはや愉快千万な車で、車の大きさにくらべて風車が小さすぎることだとか、伝導方式の幼稚さだとか操向装置が見当らな

いことだとかはまだ好いとしても、この車が敵陣の中で阿修羅の如く暴れまはつて居るまつ最中に風がバツタリ止んだらと思ふと全く吹き出さざるを得ない』



装甲風力自動車（1472年）

こんな呑気な戦車は、現代では反戦の象徴にさえなるだろう。いや、いまなら、まさに「地球にやさしい戦車」だといつてもてはやされるかもしれない。猪間の文章とともにいろいろな想像をかき立てる図である。

このあと、1916年9月15日のソンムの会戦でわたしたちが通常イメージする「戦車」が登場する過程を丹念に叙述しているのだが、それについてはここでは省く。それにしても、日中戦争が硬直状態に陥っていた時代に書いたというこの本から、15世紀のイタリアで装甲風力自動車なるものが考案されていたことを教わるとは意外であった。というのは、わたしのイメージでは、戦争中の兵器製造者とはひたすら無駄を廃し、安いコストで強力な兵器を作ることに全力を注いでいるのであって、まさか、ダ・ヴィンチの考案した戦車に驚嘆し、古代バビロニアの王様が乗った戦車に思いを馳せ、風車をクルクル回しながら進む自走式戦車の欠陥について考えているとは、想像すらできなかったからである。

猪間はつぎのようにさえ言う。「今日飛行機と戦車があらゆる兵器の中で一番花形となつ

て居るのはそれが新しい兵器だからだけでは無い。そのどちらもが人類発生以来の夢を実現したからなのである』。この役立たずの風力戦車は、猪間にとっては人類の夢を実現する史的展開のなかのひとつのステップなのだ。

この猪間を、人殺しの道具の設計者として倫理主義的に断罪することはたやすい。だが、主觀的には人類を背負っているこの技術者が現代社会に投げかける問いは、とても重いとわたしは思う。なぜなら、「軍事技術」とは人類にとって身近であり「文化」であると猪間は信じているからだ。たとえば、未来の戦車についてつぎのように述べている。「心理的兵器と言へば、数年前著者が或る車を設計したとき、正面を怪獣の顔になぞらへたらと思ったが、笑つて誰も相手にして呉れないで止めたことがある。[……] 今にきつと、お獅子の面を近代化したやうな形相をした戦車が『噛むぞおーツ』と呴え乍ら陣内に踊り込んで来るやうな時が来るであろう』。幸か不幸かこんな人間味のある戦車は今まで開発されなかつたが、猪間にとって戦車とは第一に心理的兵器であることに注目すべきだろう。戦車とは、人間の感情や感覚、文化と溶けあつた兵器なのである。

兵器の歴史学的研究はもっぱら専門の研究者と軍事マニアのなかでなされており、そのほかの人々はあまり興味を持たない。イラク戦争で米英軍の戦車が発射した無数の劣化ウラン弾とそれに汚染された戦車の残骸が現地の兵士や住民にもたらした被爆の状況を、世界最初の被爆国の人々があまり知らないのも、こうした知（とりわけ歴史の知）が軽視されていることと無関係ではない。それは、この国で兵器研究が半ばタブー視されてきたことばかりでなく、たとえばかつて『戦車』を15円で購入した京都大学で、今までの歴史学者と工学者が、15円分の戦車の共同研究さえ怠ってきたことにも原因がある。そもそも『戦

車』のような「工学」に分類される本は、科学史の研究者をのぞいて、「理工系」からは時代遅れとして「文系」からは専門外として見過ごされる傾向にある。しかし、こうした古い理工系の本もまた、現代社会の科学技術を考えるための一級資料なのである。

来年度、原則として理工系部局由来のバックナンバーセンターの雑誌が桂キャンパスに移転される予定である。それによって、「理系」と「文系」の本が混淆する空間が京都大学から少なくなることは間違いない。つまり、わたしにとって『戦車』がそうであったように専門外の面白い史料と偶然会えるような空間、「装甲風力自動車」のような珍物と遭遇する空間が少なくなるのだ。これは、総合大学として危機的だとさえ思う。現代社会はむしろ、サイバースペースでは成立困難なこうした知的空間を、桂にせよ、宇治にせよ、吉田にせよ、分離ではなく敢えて創造していくような図書館を必要としているからだ。

以下は後日談。戦後、猪間駿三はプラント輸出の専門家となり、ビクターオート、日本製鋼所、神戸製鋼所、日本硝子、千代田化工建設で働き、日本の高度経済成長期の海外進出の一翼を担うことになる。経済学部の図書室には『プラント輸出の実務』ある技術者の体験』(1970)という彼の著作があるが、そこで猪間は「日本人には人種差別の観念がない」からその国民性を海外進出の武器にすべきだと主張している(著書に『戦車』を記すことも忘れない)。この「懲りていなさ加減」が、彼を技術者として生きさせただけでなく、現代日本を「プロジェクトX」的「科学技術創造立国」へと向かわせようとしている。「可愛い」と思うほど戦車に魅せられたこの技術者を批判する道は、解剖するほど人間に魅せられたあの芸術家の作品を批評するのと同じほど果てしなく、また険しい。しかし、それは、カビ臭い理工系の図書にもっとたくさんの愛を注ぐことから始めるしかない。

(ふじはら たつし)

バックナンバーセンター(Back Number Center; BNC)の移設計画

バックナンバーセンター(以下「BNC」という)は、附属図書館・本館(以下「本館」という)地下2階の北側書庫内に設置された国内外の雑誌のバックナンバーから構成されています。

BNCは、昭和58(1983)年に本館が新築されたのを機会に、学内の図書館・室の狭隘化を解消し、資料とスペースの効率的な利用を実現する一助として昭和60(1985)年1月に設置されました。普段は利用度が低いなどの理由から、手元の図書館・室になくとも、本館に収蔵して利用できればよい雑誌を18の部局図書館・室が選択し、本館に移管しスタートしました。このため、該当雑誌の刊行時期は、少なくとも30年以上以前に遡ります。なお集中した際に

重複資料は1組に整理され、集密書架に収められています。

その後、昭和63(1988)年度に4部局から追加搬入があり、合計すると19部局からの9,859タイトル、148,608冊になっています。(以下これを「BNC1」とします)これ以降は、収納スペースの関係から、大規模な追加搬入は見送ってきましたので、部局からのBNC1への増加はありません。

一方、本館が購入等で所蔵している雑誌のバックナンバーは、書庫内の別の場所に排架され泣き別れ状態にあり利用上不便でした。これを解決して利用上の便宜を向上させるため重複整理を行ってBNCに統合しました。これは、